

はじめに

明治大学の本部がある駿河台地区では、新校舎建設事業が進行中である。先日新聞、テレビでも、お茶の水・駿河台のランドマーク、緑のドームが消える、と取り上げられた記念講堂(関東大震災後再建された)の取り壊しが進められている。

この駿河台再開発整備事業の新校舎建設敷地に、話題とする明治大学創立満 50 年記念図書館と新図書館と銘打った二つの建物が存在した。建物の位置も記念講堂の真裏にあたり、この記念講堂の話題の影となる存在であったこの二つの建物は、記念館(講堂)と共に取り壊しが進められている。この期に際し、この二つの図書館建築について語ることを依頼されたが、私のできる話の筋は概ね建築としての特質の紹介に止まるものである。以下紙面の許す範囲の紹介となるが、お許しいただきたい。

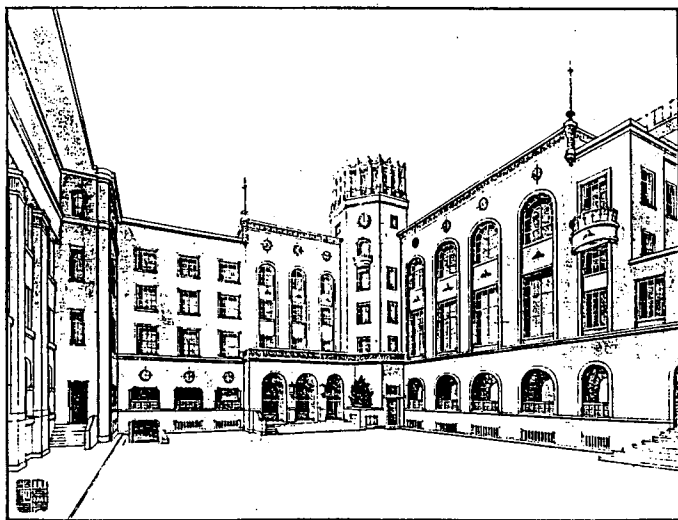
創立満 50 年記念図書館

大正 12 年の関東大震災で校舎を失った明治大学は、昭和 2 年に記念館(講堂)を完成させる。この時、図書館の整備は資金不足もあり、この記念講堂の一部に仮図書館を作ることになる。図書館の整備はその後、昭和 6 年になって明治大学創立 50 年記念事業として、卒業生に寄付を求め建設したものである。この 50 周年記念事業は昭和 6 年に盛大に行われ、50 万円が集められた。この資金をもとに記念図書館が竣工するのは、昭和 7 年のことになる。

図書館に残る「明治大学創立満 50 年記念図書館建設資金募集の趣旨」に示された当初の記念図書館の計画概要を示すと、その規模は、総延べ坪 2028 坪 1

合(約 6692.4 m²)とあり、1 号館裏(西側)の庭を L 型に囲む形の平面形をしている。

この時示された計画建物は、地下 2 階地上 5 階の鉄骨鉄筋コンクリート構造の建築であった。地下 2 階は書庫、物置、製本室、消毒室と図書館の一部があり、地下 1 階は図書館の管理部門、図書館事務室と 45 坪の柔道場、部室の 9 室が配されている。1 階は中庭に面して玄関が取られ、図書館事務室・館長室と新聞閲覧や参考閲覧が配置され、2 階は 138 坪の大閲覧室と女子・校友・教員それぞれの専用閲覧室、3 階は 13 の研究室と 2 階の大閲覧室の上部吹き抜け、4 階には 150 坪の校友大ホールを兼ねた大会議室と 14 の研究室、5 階は大学院生研究室(12 坪～18 坪)が 4 室、これらが各階の構成で、複合機能を持つ建築であった記録がある。この建物の建築空間としての特徴は、玄関ホールが 1 階より 5 階まで階段室と抱き合わせになって取られている吹き抜けであった。実現していれば、この垂直方向を強調したデザインは、入館者には壮大で力強く、深い印象を与えるものになったと想像され



中庭と幻の記念図書館の姿図

る。もう一つの特徴は外部のデザインである。中庭に面しL字型に配された図書館は、北西の隅部に塔屋を持っている。これはL字の2方向を繋ぐ物として図書館建築の象徴、シンボルとなるものを求めたのであろう。平面形からはこの形が必然となる根拠は読みとれず、あくまでもデザイン上から取られた形と考えられる。全体の意匠は、正面の記念講堂をネオバロック風意匠の建築(設計者はグレコローマン・奈良平安様式と称されている)とすれば、この記念図書館はベネチアンゴシック風の外観を持った建築であった。設計者は記念講堂と同じ大森茂氏と考えられる。図書館の打合せ記録に大森技師の存在が示されている。以上が資料から当初計画の概要を紹介したものである。これが幻の図書館と言われるものなのであろう。

実際に記念図書館として建設されたのは、「明治大学学報 178・9号」(昭和6年9・10月号)によれば延べ坪 479.382 坪(約 1581.96 m²)、閲覧室 2 その他と記録されている。およそそれは当初計画の四分の一の規模の記念図書館が出来上がったことになる。この実施計画についての詳細な内容の記録は見つけ出すことが出来なかった。

昨年(平成7年)秋まで閲覧室として使用されてきた記念図書館の部分が、創建当時の面影を伝えていたと考えられる。この内部は、1 階の大閲覧室と 3 階の大会議室を閲覧室として改修したものと考えられる。この閲覧室は落着きのある、白一色漆喰仕上げの壁、天井、清楚感が漂う質高い空間であった。大空間を支える太いどっしりとした力強い柱、これも中庭南側は円柱、北側は角柱と意匠的にも凝ったものであり、この柱頭に施された唐草模様のレリーフ、弓なりに形取られた閲覧席の空間を覆う梁型、ほど良い天井高さなど、静けさのなかに心地よい張りのある緊張感を持つ空間であった。現在、記念館資料編纂を手伝うな

かで整理する資料に図書館家具図面があり、これらの家具を配した閲覧室を想像すると、一層の重厚感が加わる。

この記念図書館と、軽快な外部渡り廊下で結び北側に増築されたのが、堀口捨己教授設計による新図書館であった。

新図書館

まず概要から紹介を始めると、この新図書館はほぼ駿河台校地の中央に位置していた。竣工したのは昭和 34 年(1956 年)4 月、設計は工学部建築学科の堀口捨己教授(1895 年～1984 年没、工学部教授在任 1949 年～1965 年)とその研究室の当時の門下生(早川正夫、荒井孝善、堀川勉、奥村博子、笠井由雄、影山忠義の諸氏)によるものであった。

建築面積は 509.2 m²の、延べ床面積は 2860 m²で、構造は鉄骨鉄筋コンクリート造の 8 階建の規模で、この内、書庫は下層の 4 層(1 階から 4 階)、残る 4 層、上層部(5 階から 8 階)に参考室・閲覧室、これがこの図書館の階構成であった。敷地が北と南とに 10 メートル近い段差があり、このことが、玄関を吉郎坂を上りつめた所の 5 階に取り、更にこの階構成を導いたものと考えられる。蔵書数は 34 万冊、閲覧室席数は 360 席であった。

当時、この新図書館は、堀口捨己教授の設計と言うこともあって、多くの建築雑誌に紹介され、大学図書館建築(空間構成・規模・意匠)としてモデル的な存在であった。正面玄関を北に取り、吉郎坂側に向け深い底を持った、毅然と立つ姿には大変印象深いものがあり、明治大学の気風を象徴する存在であった。吉郎坂から木立を透して見る北側の姿(デザイン)は、清楚で、骨太い力強さを漂わせたもので、特に早朝、北の面に光が射し、玄関の上部の窪んだ部分に影が落ちるこの時、この図書館は一層力強く見えた。季節的にも秋、前庭の銀杏が色づくとき、この光輝く銀杏を透して見えた

図書館の姿も忘れられない。数ある堀口教授設計の詩情漂う明治大学校舎の中でも、最も完成度の高い建築で、曖昧を許さない厳しい学者、数奇を極めた茶人、歌人、こんな堀口捨己教授と重なるものであった。

堀口教授の建築の特徴の一つは、外部空間の存在を意識したデザインにある。庭の研究者・設計者としても第一人者であり、常に建築を取りまく環境との関連性を重視し、外部空間を同次元に扱って建築の設計が行われた。

明治大学の校舎建築、和泉、生田校舎に、その後かなり手が加えられ変質してはいるが、この関係が存在しているのがみられる。特にこの図書館の前庭は、建築と一体となった庭として、明大の校舎の中でも秀逸のものであった。堀口教授の建築雑誌に紹介された文面に「……この図書館は大学のほぼ中心部に位置しているが、学生の交通の流れの中心ではない。いたって静かなところで、椎やもちや、公孫樹などの木立があり、それに、きあら、つげ、山榊、さつきなどの下草がそえられて、玄関前の植え込みが作られている。学生の思索や読書のためにも望ましい雰囲気を作り出すために。」とあり、建築と庭を一对のものとして設計されている。またこの庭と対照的な外部空間として、5階の南側に露台(テラス)が用意され、これも対をなすものとする。

堀口教授の建築の特徴は、得意とされる木造数寄屋建築と鉄筋コンクリート造の建築とを、意匠的表現、形を同一とはせず、一見この二つの間には設計、表現の方法の違いを感じさせるが、大きくは建築空間の構成と計画、構造材に素直な架構法、外部、内部空間のデザインに、その思想の共通点を見る。この図書館をはじめ、堀口教授が担当されたいずれの明治大学の校舎建築にも、この理念は共通したものであった。

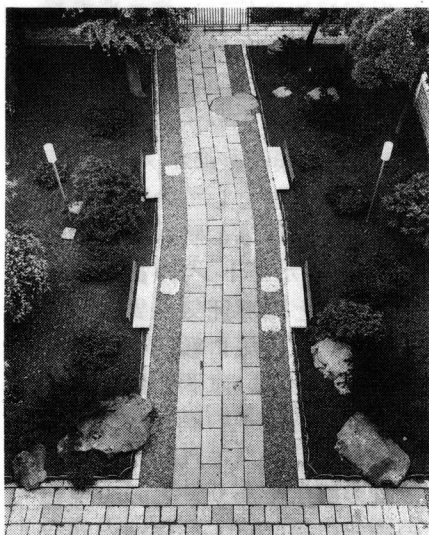
内部空間の設計にも特徴があり、その幾つかを紹介する。5階から8階までが、学生が使用する参考室、閲覧室で上下階を結ぶ移動空間を北側に寄せて取り、南側に大きく明るく開かれた参考、閲覧室を取っている。5階、7階の二つの階で、これらの室を吹き抜けとしたのは、おそらく戦後の貧しい当時の社会事情に、豊かな空間のなかで、物静かに学問させようとした心配りであろう。この部屋の前室となる玄関・通路・ホールの天井を低く押さえているのも、空間の広がりや、更に明暗をも加えこれらを強調しようとしたものであったのであろう。

5階6階の吹き抜け空間は、壁、天井、床、家具まで深い緑色で統一された空間であった。設計協力者の一人であった早川正夫氏の話からも、緑は深い森のイメージで、前庭に引き続き思索の場としての配色が行われたようである。7、8階の吹き抜け空間は、壁仕上げの素材(ホモトン)の質を生かした、明るく、階下とは雰囲気を変にした落ちつく空間であった。堀口教授の創出する空間への配慮は、あるいは関心は、常に使う人の心の動き、感情への働きかけにあったのではないだろうか。これらは空間の求めに応じた質の提供であり、この実現を空間の形態の操作に終わらず、建築内外空間を構成するトータルな要素に目配りをしていることを示すもので、図書館で言えばアプローチとなる前庭は、大変大事な仕掛けの空間であったはずである。

尻切れな紹介であったが紙面の都合でここで終わることになるが、教えを受けた者として、私的な感情となるが、堀口教授の深い素養・学識・経験から生まれた空間への解釈、空間に与えられた思想を、十分に理解できぬ内に新図書館が消えて行ったことの寂しさは拭えない。



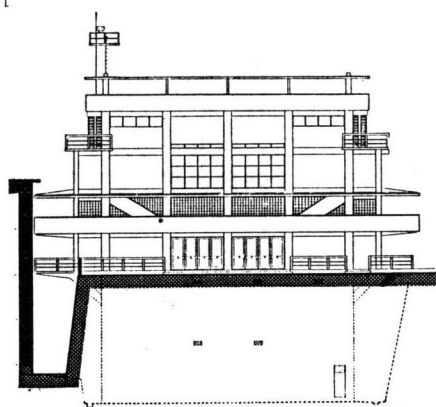
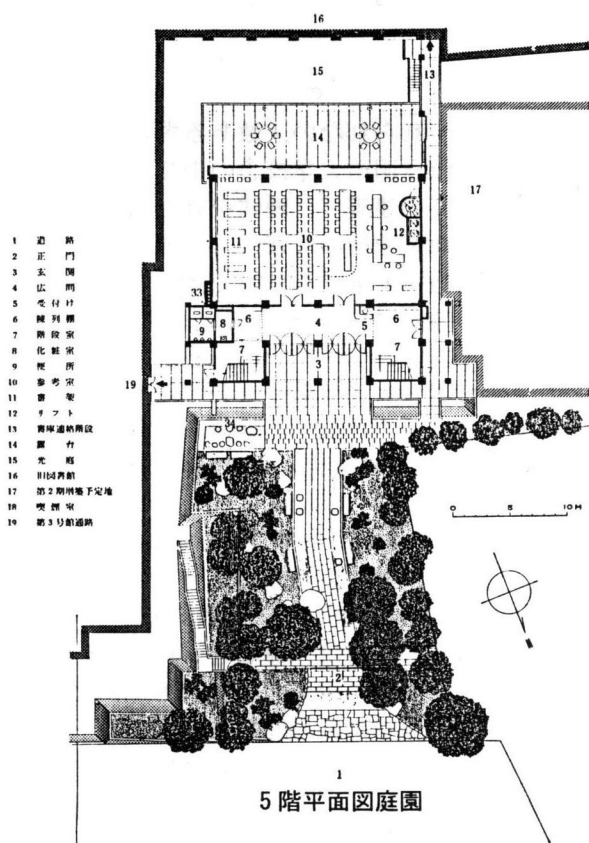
正面



通路

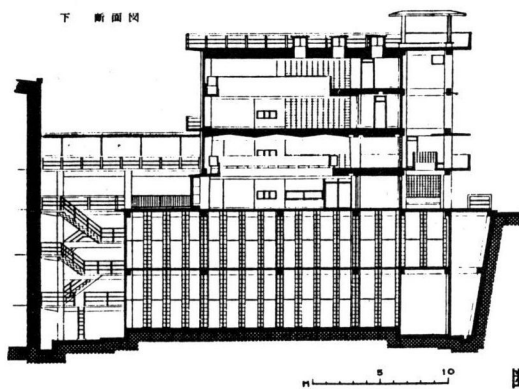


室内



北側立面

下断面図



断面